

## 第36回北海道麦作共励会審査報告

平成27年度の第36回北海道麦作共励会の出展者の麦づくりおよび審査結果の概要について審査委員を代表して報告申し上げます。

平成27年産の秋まき小麦は、10a当たり収量628kgで前年対比135%、平年対比144%と平年を大きく上回ることができました。

春まき小麦では、10a当たり収量327kgで前年対比99%、平年対比113%と秋まき小麦同様平年を上回りました。

全道の収穫量は、約66万トン、当初約56万トンの収穫量を見込んでいましたので計画対比約118%となり過去最高の収量となりました。作付面積は、約12.2万haで前年対比99%でした。

品質面では、秋まき小麦の1等麦比率が98%と過去5年間で最も高くなりました。また、春まき小麦でも赤かび病などの病害発生が少なく千粒重や製品歩留まりも良好でした。一部の地域では降雨による品質低下が見られたものの、1等麦比率では過去5年間で最高となりました。

ランク区分の平均で「きたほなみ」は、容積重866g、タンパク11.1%、灰分1.31%、FN値418秒となり、ほとんどがAランクに格付けされました。

「春よ恋」は、容積重854g、タンパク13.1%、灰分1.67%、FN値409秒と大半がAランクに格付けされました。

収量で昨年を大きく上回った要因として、6月下旬から7月中旬まで低温傾向となり、登熟期間が48日間と平年より4日長かったこと。また、穂数はやや多く千粒重も重く、製品歩留まりも高かったことによります。

次に、麦作共励会の経過について申し上げます。8月7日に第1回審査委員会を開き、8月10日に地区協会に案内、関係機関・団体に後援依頼など積極的な参加推進をお願いしました。

本年産は全道的に良い作柄となり、関係者の熱意で出展は8点を数えました。出展者の成績内容を見ると、各人とも本年の成績が素晴らしかっただけでなく、天候不順で作柄が芳しくなかった過去の年でも安定した成績を上げており、あらためて天候に左右されない確かな麦づくりをやっておられることを強く感じた次第です。

8点の内訳は、第1部（畑地における秋まき小麦）個人で2点、第1部（畑地における秋まき小麦）集団で2点、第2部（水田転換畑における秋まき小麦）個人で3点、第2部（水田転換畑における秋まき小麦）集団で1点でした。

11月11日に第2回審査委員会を開き、推薦調書を基に審査を行い、部門毎の賞を選考し、12月1日に現地調査を行い、正式に各賞を決定いたしました。

以下、最優秀賞者の麦づくりの概要について紹介いたします。

### 【畑地における秋まき小麦・個人】部門

最優秀賞を受賞された小清水町の新和農場は、オホーツク管内東部にあって畑作物を中心に一部野菜を導入した畑作+野菜経営を行っています。28haの畑地に小麦、てんさい、でん粉原料用ばれいしょを栽培し、野菜ではごぼう、にんにくを栽培しています。

秋まき小麦は「きたほなみ」を作付し、製品収量で初の1ト<sub>ン</sub>を超え（1,007kg/10a）の高収量を達成しました。等級も全量1等、ランク区分も基準値内と申し分のない小麦でした。

高収量を上げている麦づくりの要因として、「追肥の打てる小麦づくり」のために少量播種を心がけ、ほ場全体をムラなく仕上げるために、きめ細かなほ場作りと追肥管理を徹底しています。

また、牛糞堆肥と鶏糞による完熟堆肥を全ほ場に3年に一度4ト<sub>ン</sub>/10aを施用し地力維持に努めています。

#### 【畑地における秋まき小麦・集団】部門

最優秀賞を受賞されたオホーツク網走第21営農集団利用組合は、網走市音根内地区にあって畑作+野菜の複合経営農家7戸で構成されています。

経営面積は217haで、内小麦面積は41haです。

平成27年産の収量は、894kg/10aと同地区の4集団の中でトップの成績でした。

利用組合は、地域の営農集団発祥の地であり、約半世紀にわたり、機械・施設の共同所有・共同利用・共同作業により徹底したコスト低減と効率化を目指しています。しかも、30代半ばの構成員が一丸となって生産技術の向上にも努力しています。

#### 【水田転換畑における秋まき小麦・個人】部門

最優秀賞を受賞された岩見沢市の滝谷農場は、岩見沢市にあって、水田+畑作の複合経営をしています。耕作面積40haで、田畑輪換などによる輪作体系に工夫を凝らしています。

特に、水稻栽培では、乾田直播と無代掻き移植栽培を導入し土壌の団粒構造を壊さずに畑作物との田畑輪換を可能にしています。また、転換畑では大豆間作小麦を実施し、連作障害を克服しようとしています。

小麦単収は、703kg/10aと地域の平均より約1.8倍と高く、品質も全量1等で製品歩留まり率は94%と高くなっています。

以上のように、それぞれ受賞された皆さんは、輪作体系を守り、土づくりを基本に、透・排水性を良くし、きめ細かな肥培管理に心がけています。

また、皆さんは地域の仲間を大切に、地域のすばらしい牽引力となっております。これまでのご努力に敬意を表するとともに、この度の受賞を心からお祝い申し上げます。

最後に本年度の麦作共励会に関係された皆さんにお礼申し上げるとともに、今後とも北海道の麦作振興に尽力されることをご祈念申し上げて審査報告と致します。

第36回（平成27年度）北海道麦作共励会審査委員長

北海道農業研究センター寒地作物研究領域長 入 来 規 雄